

「Face-To-Faceの会」たより

第31号 2016年8月 発行：大阪市立大学病院「Face-To-Faceの会」 文責：平田一人（世話人代表） 連絡先：06-6645-2857 患者支援課

ミニレクチャー

『外来でよく見る小児外科疾患 —こうやって診断し治します』

肝胆膵外科 講師 諸富 嘉樹



小児外科はこどもの外科疾患を扱う部門です。内科と外科があるように小児科（小児内科）とともにこどもの病気を治療する科です。こどものための一般外科で、成人外科とは趣を異にする診療科です。

1 診療科の概要と取り扱う疾患

小児外科は小児（内）科とともに小児医療の一翼を担います。こども特有の外科的疾患を扱います。内科に対して外科があるように小児内科（小児科）に対応するチームです。心臓、神経、骨を除く多くのこどもの外科疾患が治療対象です。赤ちゃんから思春期までの手術を要する病気を扱います。日常よく見る病気は鼠径ヘルニア（脱腸）、陰嚢水腫、停留精巣、臍ヘルニア（でべそ）、包茎、便秘があります。対応に急を要する疾患（急性腹症など）もありますので、2015年秋から「小児科連携ライン」を開設いたしました。06-6645-3177にご連絡ください。最初に小児科医師が対応いたします。緊急でなければ当科のホームページ

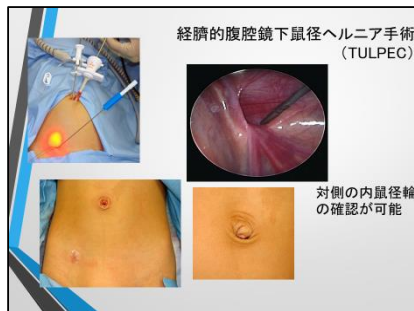
<http://www.med.osaka-cu.ac.jp/surgery2/pediatric-surgery/inquiry.html> から紹介状がダウンロードでき、これを使用していただきますと患児保護者自身で外来を予約できます（患者対応外来予約 06-6645-2351 平日14:00-16:00）。地域医療連絡室（06-6645-2877、2878）もご利用いただけます。

2 得意とする診療内容

日本小児外科学会の認定施設になっており、こどものよくある疾患から特殊な技術がいる手術まで、こども専門の麻酔科医師と協力して世界標準レベル以上の安全な治療を行ないます。さらにわれわれのチームの特色として小児泌尿器疾患と小児生体肝移植を挙げることができます。また漏斗胸に対する内視鏡下の手術も数多く行っています。

日常よく遭遇する小児外科疾患

- そけい部腫瘍
- 陰嚢内容
- 臍
- 紅門周囲
- 包皮
- 嘔吐
- 便秘
- 腹痛
- 尿路感染
- 胸壁
- そけいヘルニア、嚢索水腫
- 停留精巣、陰嚢水腫、精巣捻転
- 臍ヘルニア、臍瘻
- 紅門周囲腫瘍
- 包茎、包皮炎、尿道下裂
- 肥厚性幽門狭窄症、GER、胃軸捻転
- 慢性便秘症
- 急性虫垂炎、先天性胆道拡張症、膽管積
- 膀胱尿管逆流（VUR）
- 漏斗胸、鳩胸



「小児科連携ライン」の開設について

開設日時 平成27年11月 1日より

対象疾患 小児内科（14歳以下）
（腸重積・虫垂炎・ヘルニア・精巣捻転の小児科連携については要相談）

「小児科連携ライン」
D：直通電話 06-6645-3177
（医師の間のみで共有をお願いします）
小児外科疾患のご紹介いたします
大阪赤十字病院 小児外科
大野 研一
淀川キリスト教病院 小児外科 春本 研
との連携で小児外科救急疾患の対応を行います

症例呈示

『挙児希望があり、軽微な検尿異常に対し腎生検を行い、IgA腎症（中等リスク群）と診断した一例』

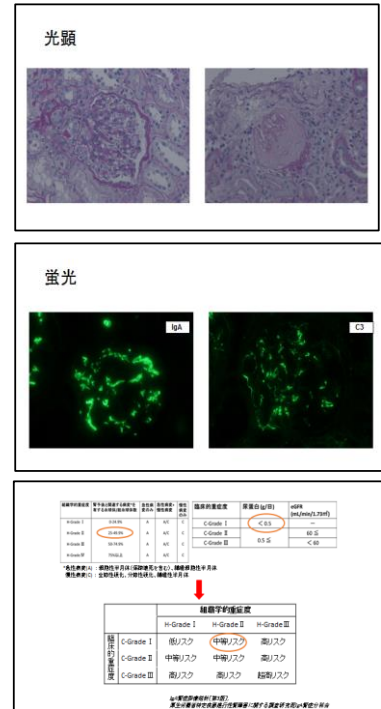
腎臓内科 病院講師 津田 昌宏

緒言：検尿異常が軽微な場合、腎生検を行わず、保存的に経過観察とすることが多い。一方、腎疾患患者が妊娠希望する場合、腎生検にて確定診断することが望ましいとされる。検尿異常が軽微であったが、挙児希望があったため、腎生検を行い、IgA腎症の中等リスク群と診断した一例を報告する。

症例：32歳女性。数年前より、検診にて尿潜血1+、尿蛋白陰性を指摘されていたが、近医にて経過観察されていた。転居に伴い当院受診。検尿異常や腎機能の増悪はなかったが、挙児希望もあり、腎生検目的で入院。入院時尿潜血、尿蛋白0.2g/day、eGFR 86mL/min/1.73m²であった。糸球体30個、全硬化3個、半月体6個（細胞性1個、繊維細胞性2個、繊維性3個）。残存糸球体全てにメサングウム細胞の増殖を認めた。蛍光抗体法ではIgA及びC3がメサングウム領域に顆粒状に沈着していた。IgA腎症（C-Grade I、H-Grade II、中等リスク群）と診断した。扁桃腺摘出術及びステロイドパルス療法を施行し、現在ステロイド内服後療法にて経過観察中である。

考察：検尿異常が軽微であっても、挙児希望があり、同意がある場合は、腎生検にて確定診断することが望ましいと考えられた。

結語：検尿異常が非常に軽微であったが、挙児希望があり、腎生検にてIgA腎症（中等リスク群）と診断した一例を経験した。



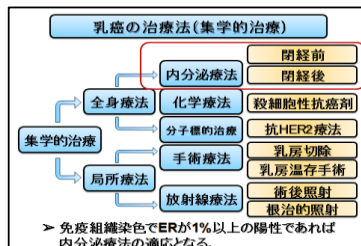
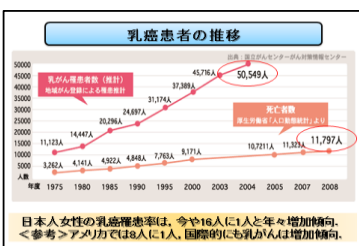
『大阪市大病院の新たな乳がん診療への取り組み』

乳腺・内分泌外科 講師 柏木 伸一郎

乳癌の罹患頻度は増加しており、今や日本人女性の16人に1人、アメリカ人では8人に1人が乳癌にかかるものと報告されている。予後は他の固形癌と比較して良好だが、進行に伴い生存率が低下するため早期発見の重要性が示唆されている。

近年では、癌は全身病であり局所療法である手術だけでは根治は難しいと考えられるようになった。そのために全身療法と局所療法を組み合わせた集学的治療が行われている。また乳癌はDNA発現プロファイルにより5種類のサブタイプに分類され、それぞれのタイプに応じた個別化治療がなされている。われわれはがん地域連携として、かかりつけの先生方に有害事象の少ない内分泌療法をお願いしている。閉経前では、抗エストロゲン剤であるタモキシフェンやエストロゲンの合成を阻害するGnRH agonistを使用する。閉経後は、アロマターゼ阻害剤を主に使用する。

市大病院における乳癌診療が、どのような体制でどのようにすすめられているかを紹介する。乳腺内分泌外科では、内分泌チームは小野田、野田、乳腺チームは高島、柏木が担当している。全員、日本乳学会乳癌専門医の資格を有しており、内分泌チームの医師も通常の乳癌診療に携わっている。そして阿倍野ハルカスには附属のMedcity21があり、ドッグなど予防医学を担っている。また乳癌研究チームでは、臨床に生かせる基礎研究を推進しており、阿倍野発・世界に通ずるトランスレーショナル研究を発信している。



乳腺・内分泌グループ

甲狀腺・内分泌 乳腺

小野田 高徳 野田 謙 高島 隆 柏木 伸一郎

先駆者臨床医 高嶋 隆 橋本 幸子 宇前 幸子

乳癌研究チーム 浅野 幸希 佐藤 敏 三田 隆史

次回開催のお知らせ 第32回Face-To-Faceの会
平成28年11月19日(土) 15:00~17:00 於:大阪市立大学医学部附属病院 5階講堂